



【さくら】 絵・文：白澤 恵舟

今年も桜花爛漫の季節が訪れた。環境はいかにも厳しいが、こらでちょっと立ち止まり、花の芳香を胸いっぱい吸いこんで、明日への鋭気にしよう。

福祉から雇用へ

会長 菅原 三朗

政府の「成長力底上げ戦略構想チーム」が2月15日にまとめた、基本構想で障害者や生活保護・母子世帯などの就労支援が柱に挙げられた。公的扶助（福祉）を受けている人の就労を促す「福祉から雇用へ」推進5ヶ年計画を策定・実施することや、授産施設などで働く障害者の工賃水準を引き上げる「工賃倍増5ヶ年計画」などに取り組むとしている。

障害者など経済的自立（就労）を目指しながらもその機会に恵まれない人を対象とした「就労支援戦略」、又母子家庭の母親やフリーターなど職業能力形成の機会に恵まれない人達を対象とした「人材能力戦略」、更に生産性の向上や賃金の底上げを

しようとしているが、その機会に恵まれない中小企業を対象とした「中小企業底上げ戦略」の三本柱からなっている。

このうち就労支援戦略は、公的扶助を受けている人の就労を促すもので「福祉から雇用へ」推進5ヶ年計画の策定・実施。及び「工賃倍増5ヶ年計画」による福祉的就労の底上げに取り組むものである。

「福祉から就労へ計画」は、障害者や生活保護・母子世帯の就労移行に関する5年後の具体的な目標を設定。希望者への就労支援と企業側の受入れ促進の両面からの取り組みを進める。

具体的施策としては、障害者就業・生活支援センターの設置（400ヶ所）。各省庁などにおける「チャレンジ雇用」の推進。障害者就労移行支援事業の全国展開及び生活保護就労支援プログラムの全自治体での

策定。マザーズハローワークなど子育て女性支援拠点の全国展開。ハローワークの就労支援チームの体制強化。障害者雇用推進法の整備。更に関係者の一層の意識改革。などを行うこととしている。

「工賃倍増計画」は授産施設や作業所で働く障害者の工賃水準を引き上げるとともに、一般雇用への移行準備を進める。その為2007年度中に全都道府県で工賃倍増計画を策定し、関係行政機関や商工団体などの協力の下で取り組みを進めるとしている。又倍増を目指す上で仕事の受注や商品開発・市場開拓などが課題となるが、企業OBなどを活用し経営手法を取り入れたり、作業能率向上のために環境を改善したり、企業からの仕事の発注を奨励したりする、としている。実功ある推進を期待したい。

新年度の運営を協議

常置委員会

県協会は3月12日から14日にかけて、平成18年度最終の常置委員会（経営、土木、建築、労務）を開催。新年度の協会並びに各委員会の運営について協議が行われた。

協会の運営については▽平成19年度事業計画骨子（案）▽平成19年度以降の分担金（案）▽特別会計等の統廃合（案）などを各委員会の共通議題として協議。特に、新年度の事業計画骨子（案）については、「協会員としてのメリット追求」がクローズアップされ、明確な形で実現することが求める意見が挙げられた。

また、それぞれの委員会では、問題提起・意見として▽ISO取得における負担の問題、評価の見直し（経営委員会）▽地域雇用を支える業界としてのPR、人材育成の場を確保する為の業界からの支援（労務委員会）等が挙げられ、新年度の検討事項として協議していくこととした。



協会人事

退職 (3月31日)	新任 (4月1日)
【山本支部】 事務局長 見上 貞 克	武 田 和 人
【秋田支部】 事務局長 荒 澤 文 夫 労務課長 小 林 敏 樹	佐々木 幹 男 吉 田 忠 雄
【由利支部】 事務職員 三 浦 生 義	

舗装・施工に関する講習会

3月16日、秋田県アスファルト合材協会（加藤義光会長）・秋田県土木施工管理技士会（北林一成会長）の共催による「舗装・施工に関する講習会」が秋田県JAビルで開催され、71名が参加。秋田県において舗装を



中心に平成19年4月1日以降適用となる施策や制度等について新年度を目前に控え、県建設交通部より担当職員から説明が行われた。

講習会では▽溶融スラグ入りアスファルト混合物の使用▽アスファルト混合物事前照査制度▽舗装現況調査結果▽舗装の構造に関する技術基準等について県技術管理室、道路課から説明・解説。併せて路盤材や現場における発生材の処理など、講習会に先立って寄せられた質問に対し回答。また、事前照査制度、骨材の状況など、参加者、県と互いに質疑・意見を交わした。

青年会

リーダー研修会

総合評価落札方式をテーマに

秋田県建設青年協議会（平野久貴会長）は3月27日、秋田ビューホテルにて平成18年度リーダー研修会を開催。会員45名が参加した。

今回の研修会は秋田県における「総合評価落札方式」をテーマに、秋田県建設交通部から試行状況や技術提案の評価基準などについて講義、また、質疑・意見交換を実施した。

研修会冒頭、平野会長は今回の研修テーマについて「我々が直面している課題である。この後の質疑応答を含め、活発な議論を望む」と述べた。続いて県建設交通部建設管理課技術管理室の小嶋宣英室長が挨拶。総合評価落札方式について参加者の理解を得たい旨を述べ、「この場をお借りして皆様の生の声をお聞かせい

ただきたい」とした上で、活発な意見交換を呼びかけた。

研修では始め、県建設交通部からテーマに沿って▽今年2月に改訂された運用ガイドラインの概要▽試行状況▽技術提案の評価基準▽入札ポンドなどの説明が進められ、技術提案については、自社能力の範囲で具体的かつ数多く提案することがポイントになると解説。

説明に引き続き行われた質疑・意見交換では、秋田県における今後の総合評価落札方式施行の動向を中心に、参加者と県との間で質疑が交わされた。

研修会の最後、平野会長から「ダンピング防止のルール作りを切にお願いしたい」との要望に対し、県は「対策強化の必要を認識している」とした上で、強化策を考えていく旨を回答した。



近代化 遺産

土木 建築の

No.56

三浦家住宅

秋田市金足黒川字黒川178



秋田市近郊の農村地帯にある農家屋敷で、金足小泉湯の旧奈良家や太平の旧嵯峨家と並ぶ県内屈指の豪農屋敷を見せるのが黒川の旧三浦家である。

大正初期、草津川の支流にある黒川油田が大噴出をした頃、その油井開発のため黒川村はいつとき賑わいを見せた。その頃、三浦家では座敷の一角を改造して「羽後黒川郵便局」を開設、先端的な文化の担い手となった。

三浦家は藩政時代に代々、黒川村の肝煎を務めた家柄で、地区の中心的存在であった。元をたどると、同家は相模三浦半島の出自とされ、鎌倉時代以降、一族は各地に定住。八郎潟町高岳山の麓に一族の浦城の城主が三浦氏で、黒川三浦氏は戦国時代の天正年間（一五七三〜九二）、この地で帰農したと伝えられる。

集落の中心にある高台は中世の黒川館跡で、そこに三浦家の広い屋敷が構えられた。三浦家は大きな主屋（母屋）を始め、米蔵、文庫蔵、味噌蔵、土蔵、馬小屋、鎮守である稲荷社、表門、庭園などが見事な広がりを見せている。母屋は文久元年（一八六一）の建築とされるが、明治二十年代から大正にかけて瓦屋根を

もつ米蔵や土蔵などが建造、修復された。また、三浦家は二〇〇〇年から4年の期間をかけて大々的な復元工事がなされた。中でも広さ百七十坪（五六一平方m）、木造茅葺き、平屋建て、両中門造り（本屋に馬屋中門と座敷中門が突出した凹形の造り）の主屋は、江戸時代末期の豪農屋敷として東北でも最大級のものとされている。茅葺きの修復工事に際しては、北上川河口や富士山麓から膨大な量の茅を調達し、秋田県地方独特の縄締塗法で屋根が葺き替えられた。また粗壁塗りの米蔵や土蔵は壁の保護のために白漆喰塗りが施された。さらに文庫蔵の入口扉は非常に手間のかかる黒漆喰仕上げとなっている。

住宅内部は大黒柱の立つ広い土間から接客用のオエ（御上）、オジョメと呼ばれた常間、奥座敷や中座敷などの各座敷、仏間や書院造りの上賓客の座敷などが配置される伝統的な大農家屋敷の典型様式となっている。

国重要文化財の指定を受けた三浦家住宅は、現在、三浦館保存会の管理になり、不定期公開となっている。

（取材・構成／藤原優太郎）

お知らせ

今月号より一面企画の新シリーズとして、水墨画家・白澤恵舟氏の作品を掲載して参ります。

白澤氏は日本国内から海外まで幅広く活躍。作品は「水墨画の伝統を踏まえた筆の勢い、溢れる生命力を感じる魅力がある」と評され、国内外数多くの賞を受賞されています。また、国際交流も活発に行い、ワークショップや講演などを通じて水墨画の振興に尽力されています。秋田市在住。

表紙／水墨画

白澤恵舟



プロフィール

1930年 秋田県五城目町に生まれる

現在

社団法人日本中国水墨画交流協会副理事長
全国秀作水墨画公募展審査員
全国水墨画美術協会理事
秋田県墨絵芸術協会会長
●ジョイナス恵舟水墨画教室講師
●恵友会水墨画教室講師
●さきがけカルチャースクール水墨画教室講師

労務単価

建退共秋田県支部から

(財)建設業福祉共済団から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

情報コラム Vol.11

総合評価落札方式 ～技術提案のポイント～

秋田県では現在、総合評価落札方式による工事を試行しており、平成19年度においては4,000万円以上の工事件数の内、20%を同方式により発注することを目標に試行を進めることとしています。

この方式は、価格と技術を総合的に審査した上で落札者を決定するものであり、特に技術提案に当たっては以下の点を留意することが重要となります。

・共通（特記）仕様書等で規定されていない、考えや取り組みを具体的に提案すること。
※当たり前（仕様書記載）のことを書いても点数はもらえない。

・数多くの提案をすること。（1位満点方式）
※提案者の中でもっとも獲得ポイントが多いものが満点。

・特に、自社の実績に基づいて提案すること。
※確実に出来るものを提案しないと、ペナルティになる。

また、このような提案を行っていく為には、▽技術向上に務め、ノウハウを集積すること▽総合評価落札方式の対象外案件でも良い実績を残す（個人・会社の評価に繋がる）ことが重要になります。

相撲の品格

菅 禮子 (作家)

昭和十年代、玉錦という人気の高い関取がいて、たしか大関だった？と思うが、双葉山の好敵手だった。その玉錦が場所中急性盲腸炎をひき起こして、あっけなく亡くなり、人々を驚かせ、悲しませた一わたしの相撲に対する関心は、このできごとを新聞記事で読んだことから始まる。人気絶頂の刻に突然、その人を襲った恐ろしい運命にわたしは衝撃を受けた。一諸行無常一子供ごころにそんな感想を抱いたのかもしれない。

その頃、たまたま京城（現在の韓国・ソウル）で巡業による相撲の興行があった。場所が学校のすぐ傍（今の南大門市場）だったこともあって、先生に引率されて観に行ったことがある。あてがわれた席は大テントの天井棧敷のような高い所で、はるか下の顔も名もわからぬ幕下力士の取組がえんえんと続くのにすっかり倦きてしまったわたしは、先生に「おしっこに行かせて下さい」とお願いしてその場から脱出した。

すると出口までの渡り廊下の途中に、大きな関取が紺に白い波を散らした浴衣を着て仁王立ちになっていた。行き交う人びとは皆笑顔で立ち止まっては、関取の巨体を触ったり、撫でたりしている。横綱の男女の川だった。その、少し後方にもう一人同じように浴衣姿の関取がいて、こちらの方はやはり横綱の武蔵山だったのだが、今でいうイケメンのこのお角力さんにわたしは好感を持った。ふとなにかにぎやかな声があるので好奇心にかられてテント裏側に回ってみると、二、三人の関取が、こちらは裸にまわしを締めた姿で、空の酒樽を伏せたような物に腰かけており、その周囲を島田髷に真白に首筋を塗った芸妓衆が取り囲んで盛んに嬌声をあげている。わたしをはじめ脱出組の小学生たちがもの珍しげにその場を眺めていると、黒塗りの下駄に、着物の裾を高々と持ち上げたひとりの芸妓が「うるさいねえ、この子らは。ここはお前たちの来る所じゃないよ、あっちへお行き！」いきなり片手でひしゃくをとりあげて、樽の水を掬うと、わたしたちへ向かってパアッと撒き散らした。

—芸者って、美しい着物着てお人形さんみたいなのにずいぶんきついんだあ—というのが、その時のわたしの感想である。

数年後、横綱照国を中心にした相撲興行がやはり京城であった。秋田県出身ということで、秋田県人会（京城在住の秋田県出身の人々でつくっている会）が照国を招待して一夜宴会を開いた。その会に参加した父が帰宅しての第一声—

「あんな綺麗な相撲取りは見たことがない！」

「綺麗だ！」「綺麗だ！」盛に「綺麗」を連発していた。わたしは照国という横綱を見たことがないから、いかにも感に堪えないような父のその感嘆詞だけが記憶に残っているのだが、まさかその照国とこのわたしが縁戚になろうなどとは“神のみぞ知る”である。

照国—秋田県雄勝郡秋宮^{あきのみや}出身・本名菅万蔵^{すがまんぞう}、実はわたしの婚家先の菅家の舅吉四郎は菅万蔵の実家と別家同士とか、この話は姑から聞かされた。舅本人が寡黙で自らを語らない人だったから詳しくはわからない。

ところで六十九連勝中の双葉山が安芸海に敗れた瞬間のラジオによる実況放送を、偶然わたしは聴いていた。

「座布団が飛んでおります！座布団が飛んでおります！」館内の大喚声と熱狂に近いアナウンサーの声は、今も耳の奥にある。

ただ、なぜ座布団が飛ぶのか、わからなかった。今なら、テレビの画像でその様子がよくわかるのだ。照国の綺麗さも、きっと心に焼きつけられたに違いない。

ふと気づいたのだが、テレビの映像でこそわかることが、もう一つある。

それは、“心・技・体”の三つを条件とする角界における心の部分—即ち相撲の品格というべきもの—である。

勝った力士が蹲居（そんきょ）して行司から勝ち名乗りを受けるその刻、力士が右手を斜め前にのぼす。この仕草をなんというのか、浅学にしてわからないが多くの力士のその場面を観ていてその所作が目止まるようになった。最初に「美しいな」と思ったのは“隆の若”である。胸を張り、さつとのべた右手がびたりと決まって若々しく初々しく心を惹かれた。近頃その所作に隆の若を凌駕して心を奪われる力士がいる。

しこ名は“豊真将”。全体に悠容とした挙作動作は気品に溢れ、さつと右斜下につき出す手の指一本々々に神経が行き届いていて、一挙手一動作、真に美しい。さらに言えば“男の色気”というべきものを、たった一瞬の動作に感じさせられる。前記二人に比べて他の力士はどうだろうか？私の独断と偏見によって敢えて言わせていただく朝青龍。毎度のこと、わざわざカメラ目線でもって「どうだ！」と言わんばかりに大見得をきってみせるのが草原を駆ける若者の雄叫びに似てほほえましくもあるが、いささかうんざりさせられる。他の力士達も勝ち名乗りを受ける時、まことにぞんざいに手を振り回してそそくさと立って行く。ただ、いくら礼儀正しくても強くなくては三条件に外れるがしかし、強ければいいというものでもない。裸をさらしたこの相撲の品格というものは、綺麗な肌でもなく、肉体美でもなく伝統に裏打ちされた技であり、所作である。たくさんの人々がテレビでこの場面々々を観ている筈だが、ここに上げた所作にうかがえる豊真将の品格と、清々しい男の色気、内面の剛毅さに気づいて観ているひとが何人いるだろうか？ほめすぎて“ホメ殺し”にならねばよいが……。